

研究動向報告

『イーリアス』研究における新分析論の展開

佐野 好則

20世紀後半のホメロス研究をごくおおまかに素描すると、英語圏を中心として口承詩理論が脚光を浴びたのに対して、ドイツ語圏では特に『イーリアス』研究において新分析論が主流となったといえるであろう。新分析論の成立の背景には、『イーリアス』第16歌から第23歌にかけてのパトロクロスの武勇と死さらに葬儀と葬送競技に至る一連の出来事が、トロイア伝説を内容とする「叙事詩の環」に属する『アイティオピス』で叙述されていたと考えられるアキレウスの死の前後の出来事と対応するとの認識があった。新分析論者の中には『イーリアス』の詩人が「叙事詩の環」に属する諸叙事詩そのものを手本として用いたと考える者もあったが、次第にこれらの叙事詩の成立は『イーリアス』以後であり、手本として用いられたのは「叙事詩の環」に属する諸叙事詩に先行する作品(例えば『原アイティオピス』)であるとされるようになる。その後ドイツ語圏以外でも新分析論は重要な方法論として認められ、『イーリアス』研究においてこの手法によるすぐれた成果が積み重ねられてきた。それと同時にその問題点の指摘も散見される。例えば、手本となった叙事詩にあったモチーフが『イーリアス』の中に挿入されたために齟齬が生じているという主張が新分析論者たちによってなされる場合、「齟齬」を引き起こしていると見えるモチーフはむしろ『イーリアス』の文脈において効果的に用いられているとの指摘、あるいは手本となった特定の叙事詩から借用されたのみなされるモチーフは、むしろ叙事詩のジャンルに共通する典型的な要素とみなすべきとの指摘などである。

新分析論は、手本ないし原型(例えば『原アイティオピス』におけるアキレウスの死)から翻案(例えば『イーリアス』におけるパトロクロスの死)が作り出されるプロセスを解明しようとする際に、手本ないし原型が現存せず、痕跡をもとにあるいは推測によってそれを再構成する作業をともなう研究方法である。その点で、これと大なり小なり類似の研究方法は『イーリアス』を越えて、古典古代研究の様々な局面にも用いられているのではないだろうか。

本発表においては新分析論の手法が典型的に用いられてきた『イーリアス』第8歌のネストールの危機、第16歌のパトロクロスの死、第18歌のテティスによるアキレウスの死の予言およびアキレウスとテティスら海の女神たちによる嘆きなどの場面を取り上げ、新分析論の手法による解釈の長所と問題点を具体的に検討する。そのことにより、『イーリアス』研究の一つの顕著な傾向を理解するとともに、他の研究分野にも参考となりうる研究方法上の示唆を得ることを目指したい。

アリストテレスの『形而上学』はつねに論争の書であるが、その研究は近年いくつかの重要な点で新たな段階を迎えつつあるとすることができる。事実、新しい校訂版を共同で準備しているO. PrimavesiとM. Rashedは、その校訂を通じて「まったく新しい眺望」が提示されるだろうと語っている。このような見通しの根拠となっているのは、諸写本の伝承過程の研究の進展と、アラビア語訳など従来は十分に視野に入っていなかった伝承との綿密な照合である。しかし、新たな校訂が公刊されるにはまだかなりの歳月を要するであろうし、それがこの書に対するわれわれの見方を実際に大きく変更するものとなるかどうかは、その作業結果の報告と検討をまたなければならない。

そこで本報告では、『形而上学』の近年の研究動向を、写本伝承や校訂の問題にとどまらずより広い論点にわたって俯瞰し、従来の有力な見解との比較を通じて、それが「新たな段階」と呼びうるような状況にあることを示すことを試みる。以下の事項を、時間が許すかぎりで報告する予定である。

(1) アリストテレス著作集 (Corpus Aristotelicum) および『形而上学』という書の成立のプロセスとそのなかでアンドロニコスの果たした役割について、J. Barnesによる詳細な批判的検討とその後の評価をふりかえる。

(2) (1)の成立の経緯と関係する、アリストテレスの著作内における『形而上学』の位置づけ、論理的著作(「オルガノン」)と自然学的著作との関係についての諸見解を検討する。

(3) 『形而上学』の現存する諸写本の伝承において、写本E (Parisinus gr. 1853)と J (Vindobonensis phil. gr. 100)に代表される α 系 (Jaeger OCTのIIに相当)とAb (Laurentianus pLut. 87,12)に代表される β 系とに大別される。これまで標準的テキストの校訂者であるJaegerとRossの写本系統の理解は、D. Harlfingerによる研究によって修正されたが、近年ではPrimavesiをはじめとした研究者によって、諸写本間の関係とそれぞれの信頼性についての(テキストの選択にもかかわる)見解が提出されている。なかでも重要なのは、これらの写本とアレクサンドロスをはじめとした古代の註解との影響関係である。こうした研究状況を、できれば具体的な箇所にして概観する。

(4) これまで解釈上の論争点となってきたアリストテレスの議論について、(3)の諸写本の評価と関連する箇所を例としてとりあげて考察する。

(5) 十二世紀のアヴェロエスは、当時の『形而上学』アラビア語訳にもとづいて、影響力の大きい註解を残しているが、彼が使用したアラビア語訳のもととなったギリシア語のテキストは、現存するどの写本よりもさらに以前のものと推定される。新たな校訂者たちが重視するそうした訳や継承の伝統について私には発言する資格はまったくないのだが、アラビア語註解の近代語訳など比較的情報が与えられているA巻ないし Λ 巻に関連して、その意義を考えるための材料を提供する。